寄稿

小さな物語に耳を澄ませて

人と人、人と地域をつなぐ「聞き書き」という営み

植村　友貴（うえむら　ゆうき）
中頓別町地域おこし協力隊

はじめに

中頓別町は、北海道宗谷管内に位置する、人口約1,500人の小さな町です。現在の主産業は林業と酪農。古くは砂金掘りで栄えた地域でもあります。

町を取り囲む山並みや、山間に広がるゆるやかな牧草地、その上に広がるのびやかな空が、とても気持ちの良い町です。私はこの中頓別町に2021年７月に移住し、保健福祉分野の地域おこし協力隊として、「地域共生社会」をテーマに活動しています。

今回は、2022年から2023年にかけて行った町の高齢者の方へのインタビューと、その内容をもとに制作した冊子『聞き書き 中頓別』についてご紹介します。

１　小さな物語の豊かさに魅了され

『聞き書き 中頓別』は、中頓別町に在住する当時70代～90代の高齢者の方々９名にうかがったライフヒストリーを、語り口を残してまとめた冊子です。お話をうかがったのは、酪農や林業を経験されてきた方、町で牛乳屋を営まれていた方や、元個人商店の経営者、先代から店を引き継いでクリーニング店を経営されている方､郵便配達員としてお仕事をされていた方など。中頓別で生まれ育った方の他に、町外出身の方や、幼少期まで樺太で過ごしていた方もいました。

インタビューは、北海道大学文学部地域科学研究室の宮内泰介先生のゼミ生と共同で行いました。宮内ゼミナールは2021年から中頓別町でインタビュー実習を行っており、2022年度の実習内容について相談を受ける中で、高齢者の方々にインタビューをすることになりました。私自身も地域の高齢者の方々と日々お話する中で、その物語の豊かさに魅了され、ゆっくり時間をかけてお話を聞いて、聞き書き集としてまとめたいと思っていたところでしたし、学生たちにもぜひ聞いてほしいと思ったからです。

写真 １　地域の方へのインタビューの様子

実習が行われたのは、2022年７月１日～７月３日。数名ずつのグループに分かれ、地域の高齢者の方々のお宅にうかがってインタビューを行いました。

実質２日間という短い時間の中でのインタビューでしたが、「中頓別でのインタビューのあと、自分の祖父母に話を聞きたくなり、実家に帰ったときに聞いてみたら、まったく知らなかった自分のルーツを知ることができた」という学生もいて、学生それぞれに学びがあったようです。中頓別での「他者の人生を聞く」という経験が、学生たち自身の人生の肥やしになっていてくれれば嬉（うれ）しい限りです。

２　地域の人たちと一緒に作り上げた聞き書き集

インタビューの内容は、後日、聞き手で分担して文字起こしを行い、別の機会に私が個別でうかがったお

話や実習後の追加の聞き取り内容も併せて、『聞き書き 中頓別』として編集していきました。

編集や冊子化の作業は、北大の宮内先生と大学院生、私の３人が中心になって行いましたが、『聞き書き 中頓別』は、町の人たちと一緒に作り上げた本だと思っています。冊子の表紙には、中頓別在住の絵描きの方の絵を使わせていただき、中表紙のなどのデザインも地域の方に協力していただきました。そして何よりも、この本は、語り手の方々が語ってくれたからこそ、そこに編者の私たちが伝え残したいと思うものが詰まっていたからこそ、作ることのできた本だからです。語り手の人たちだけではなく、かれらとともに同じ時を生きてきた、たくさんの人たちが紡いできた物語。その豊かさに魅了され、背中を押される中で生まれたものだと思っています。

写真 2 『聞き書き 中頓別－北海道中頓別町の人と暮らし－』

冊子は、お話をうかがった９人の語りを１人ずつまとめる構成になっています。

『聞き書き 中頓別』目次

体を丈夫にして、一生懸命努力さえしてれば、何とかなるなあ　岩田利雄さん
苦労して、苔さから這い上がって、やっといま楽になった　岩田ミドリさん
昨日まで「一緒に頑張るべや」って言ってた仲間が
仲間でなくなる、それが嫌だったんだ　西一彦さん
きょうだいみんなで牛乳配達を手伝ったんだ　小林弘さん
小さいときから働いていたから恥ずかしいもなんもないね　小林ミエさん
むかしからの顧客との結びつきは強いんですね　平田栄子さん
大きなかごを背負って洗濯物の外交に行ったね　大塚豊さん
郵便局に入って、本当にたくさんの人にお世話になった　村上清治さん
この歳になってまた「新」に行き着いたのがおもしろくてね　長田武志さん

3　聞くこと、知ること、そして伝えていくこと

3-1　小さな物語から見えてくる新しい「中頓別の物語」

ここからは、『聞き書き 中頓別』のページをめくりながら、冊子の内容やその制作を通して感じたことをご紹介したいと思います。では最初に、44ページを開いて、西一彦さんの語りを見てみましょう。

“昭和30年代以降、国の政策で、（酪農業は）規模拡大、単純経営にして機械化、労働生産性をいかに高めるか、と。そうすると、いままでの戦中戦後のないない尽くしの中で隣近所仲間たち支えあってた農家の中で、「誰かやめんかな、誰かやめたら早く自分が買って大きくしたい」と、土地の奪い合いが起こるでしょ。昨日まで「一緒に頑張るべや」って言ってた仲間が仲間でなくなる。言ってることと腹の中で思ってることが違うというのがな、どうも俺は馴染めなかったんだよな”（西一彦さん、pp.44-45）

西一彦さん（1936年生まれ）は、元酪農家。戦後、全国的に酪農業の規模拡大が奨励される中で、その流れに違和感を抱き、小規模経営を貫いてきました。

一方、同じく元酪農家の長田武志さん（1942年生まれ）は、西さんとは逆に規模拡大の道を選択し、家族と酪農実習生とともに牧場を経営してきました。

“牧場やってるうちはずっと大変だったよな。大変なのが慢性化しちゃってた。農業はなんぼやっても赤字赤字で食っていけない。（忙しくて）牛より先に人間が参っちゃうんだもんな”（長田武志さん、pp.110-111）

西さんと長田さんの２人は、「酪農業の規模拡大」という大きな歴史の流れの中で、それぞれ別の道を選択し、それぞれに葛藤を抱きながら、同じ地域で酪農を続けてきました。中頓別町の基幹産業の一つである酪農。町の酪農業のはじまりや乳牛頭数・農家戸数の変化、酪農に関わる大きな出来事は様々な資料に載っていますが、「規模拡大」という大きな流れの中で、町の酪農を担っていた農家の方々一人ひとりが何を考え、どんな思いで、牛とともに生きていたのかまでは触れられないことが多いです。

町内の郵便事業の発展を支えた郵便配達員の人たちが、昔は十何kmの道のりを徒歩や自転車、スキーで配達に行っていたこと。食べ物が十分にない時代、馬鈴薯でんぷんに煮豆を入れて練って食べる「流し団子」の美味しかったこと。農業を始めた頃、馬や道具をそろえることもできない中で、初めてリヤカーを手に入れたときどんなに嬉しかったか…。お話をうかがった方々が語ってくれた、たくさんの小さな物語には、けして一文にはまとめられない、一人ひとりの経験と思いが詰まっていました。

「聞き書き」とは、語り手の経験や思いをそのままに受け止め、その人の物語としてまとめていく手法です。大きな物語の枠組みの中でまとめられていないからこそ、その渦中に生きた人々の顔や思い、当時の風景が語り手の物語を通して生き生きと見えてくる。それが、「聞き書き」の持つ魅力だと思います。

『聞き書き 中頓別』の制作の過程で、町史に記されるような「大きな地域史」と、お話をうかがった方々の言葉（個人史）とが、またときに、個人史と個人史とが交錯し、つながっていくような感覚を何度も覚えました。町史を読むだけでは見えてこなかった風景が、ある方のお話を聞くことで見えるようになり、その方にお話を聞いたときにはぼやけていた部分が、また別の方のお話を聞くことで輪郭をおびてくる。まるで、バラバラに存在していた物語がつながり、新しい物語が紡がれていくような、不思議な感覚でした。そうやって見えてくる新しい中頓別の物語は、小さな物語を大切にすることの意味、この町に生きる一人ひとりの存在なしには、「中頓別」という町は存在しないのだということを、改めて教えてくれたような気がします。

3-2　かつてあった営み、今ここにある営みから学ぶこと

さて今度は聞き書き集の11ページを開いてみましょう。中頓別の藤井地区で生まれ育った岩田利雄さん（1930年生まれ）は、戦後、集落の人たちの拠り所になっていた学校や青年会の活動について語ってくれました。

“青年会では、夜学を主体にしながら奉仕活動を主に考えたね。困っている家の手助けに行ったり、馬車がはまってしまう道へ行って、石で穴を埋めて道をつくったり、何人かで草取りを手伝いに行ったり”（岩田利雄さん、p.11）

続けて、西一彦さんの語りです。

“馬でも牛でも人間と同じで、病気したり死ぬ間際ってのは、自分では動けなくなる。床ずれができるでしょ。むかしはどこの家でも、具合悪い動物いるときは、頼める近所から力あるやつを2、3人呼んできて、向き変えてやってたんだ”（西一彦さん、p.46）

『聞き書き 中頓別』の語りの中には、「助け合い」や「みんなで」の記憶があちこちに出てきます。人手のいる農作業をするときには、隣近所みんなでそれぞれの家の作業を順番に手伝っていた話。地域の伝統文化である炭焼きの技術を残すため、みんなで手弁当で炭焼き小屋を作って、寝ずの番をしながら炭を作った話。自家用車が普及していない頃、市街地から離れた集落の人が買い物に来たときには、お店の人が荷物と一緒にお客さんを配達車に乗せて、家まで送ってあげていた話。このような話の中には昔の話もあれば、現在に続く話もあります。

今、中頓別町に限らずどこの過疎地域でも、人口減少や高齢化、公共交通機関の縮小、生活を支える商店の閉業、隣近所や親戚同士のつながりで成り立っていた助け合いの担い手の減少など、たくさんの課題を抱えています。これからのまちづくりを考えていくときに、課題を解決するために新しい共助の仕組みをつくることももちろん大切ですが、かつてあった助け合いの営みや、今すでにある助け合いの営みに目を向けて、知りなおすことも大切です。「聞き書き」を通して、そのきっかけ作りができればと思っています。

3-3　人と人、人と地域をつなぐ存在として

『聞き書き 中頓別』の刊行後、一番嬉しかったのは、聞き書き集の語り手の一人である町民の岩田利雄さんが、「この本がきっかけで、私の家と遠い親戚だってわかった人がいてね。このあいだもその人の家へ行ってしゃべってきたんだけど、友達が一気に増えた感じだよ」と、とても嬉しそうに話してくださったことでした。また、この本を読んだ町民の方の中には、「語

り手の人とは普段から付き合いがあって、自分ではその人のことをよく知っていると思っていた。でも、この本を読んだら知らないことばかりで、『聞くこと』がなぜ大事なのかわかった気がした」という感想を寄せてくださった方もいました。聞き書き集の語り手の人たちのことは、町の人たちは大概知っていて、みんなお互いに顔見知りです。でも、顔馴染みの地域の人たち同士だからこそ、語り合わないこともあるのではないかと思います。

地域の方々との日常の会話の中には、心を惹(ひ)かれる小さな物語のかけらがたくさん散りばめられています。そのかけらは、聞き流されてしまうことも多いですし、誰かがその価値に気づいたとしても、直接聞いた人の中だけに留まってしまうことも多いです。この本が、それまで日常の会話の中では知り得なかった、語り手の人たちの人生や思いを知り、町の人たちが再び出会い、つながるきっかけになれたことが、嬉しかったです。

『聞き書き 中頓別』に載せさせていただいた一人ひとりの経験や思いは、「昔こうしていたのだからこうしよう！」と、すぐに、そしてわかりやすくまちづくりに活かせるようなものではないのだと思いますし、そこには現在の町の課題を解決する「正解」が載っているわけでもありません。でも、世代を超えて伝えつないでいきたい大切なことが、一人ひとりの語りの中にたくさん詰まっています。もしかしたら、今から数年後、数十年後、この町の将来を担っていく世代の人たちが、この本を通して語り手の人たちと出会い、時を超えて対話をすることで、何かを感じてくれるかもしれない。その「何か」を受け取った人たちが、これからの中頓別という地域をつくり、次の世代につないでいく。そんなふうに、この本が、先人たちが築いてきた大切な「何か」を後世に伝え、人と地域をつなぐ存在になっていってくれればと願っています。

おわりに　－「開拓」の前にあった風景を探して－

『聞き書き 中頓別』の編集作業が終わり、印刷製本会社への入稿も済み、あとは完成を待つだけ。そう思っていた2023年の春、私は中頓別の中心市街地から20㎞ほど離れた小頓別地区の林の中でアイヌネギを採っていました。アイヌネギの根本を切り、独特のあの香りが鼻孔を通り抜けた瞬間、私はふと、とてつもない後悔に襲われました。

聞き書き集の編集を行っていたとき、そして、あとがきを書き終えたとき、私の頭の中には、「開拓」の前の中頓別の風景がどれだけ浮かんでいただろうか。そんな思いが、あのツンとした香りとともに、鼻孔から脳へ、そして身体中を駆け巡り、心の中にずしんと残ったからでした。同時に、いま自分が立っているこの場所に和人が住み着く前にそこにあったであろう、木々の生い茂る深い森の世界と、「開拓」が始まり、いつしか鉄道が通り、人々や物が忙しなく行き交っていた賑(にぎ)やかな時代、そして、人口が減り、道を行く人影もまばらになってきている現在を一気に駆け抜けたような、不思議な感覚に陥りました。

中頓別は、同じ宗谷管内の沿岸地域に比べて、アイヌの方たちに関する歴史資料が少なく、中頓別町史の中での記述もけして多くはありません。それでも、わからないから、なかったことにしていいわけではない。足元のアイヌネギを見つめながら、私は「その前の風景を探したい」と思っていました。

探そうと思い始めると、断片的ながらも、町の方からいろいろな声が届くようになりました。本当にかつてあった姿を完璧に正確に知ることはできませんし、開拓の前の風景を知ろうとすることが、もしかしたら誰かを傷付けてしまうのではないかという迷いも、私の中にはもちろんあります。それでも、この中頓別に「開拓」の手が入る前、ここにはどんな人たちがいて、どのように暮らしていたのか、森の中で生きていた動物や虫たち、森の木々や草花、河を流れる水の音や、木々の間を吹き抜けていた風の音、その風景を想像し続けること。そこに立ち戻らなければ、いくら現代の文脈だけで「地域共生社会」を語っても、何か大事な芯が抜け落ちてしまうような気がするのです。

「現在」と「これまで」の小さな物語に耳を澄ませて、そこから「これから」のまちづくりを考えていくこと。それが私にとっての「地域共生社会」との向き合い方なのだと思っています。

最後になりますが、インタビューにご協力くださったみなさまをはじめ、『聞き書き 中頓別』の冊子化にご協力いただいたみなさま、また今回、掲載の機会をご提供くださった北海道開発協会様、ありがとうございました。この場を借りて心より感謝申し上げます。